

5つのパンと2匹の魚で5000人の人々を満腹にするしるし(奇跡)を行った主イエスは、「わたしは天から降って来たパンである」と言われた(32節)。そしてパンの奇跡を見て主イエスのもとに集まって来た人々に、「わたしの父が天からまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」と言われた。人々が「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と求めると主イエスは、「わたしが命のパンである」と言われた(似た問答として4章のサマリアの女との対話参照)。ご自分こそ、「天から降って来て世に命を与えるまことのパンである」と宣言なさったのである。これを聞いたユダヤ人たちがつぶやき始めた、というところから本日の箇所が始まる。

41—42節.

「つぶやき始め」と訳されている言葉(γογγύζω、ゴググゾー)は、「不平不満をいう、文句をいう」という意味(他に43, 61, 7:32, 一コリ10:10に用いられている)。

ユダヤ人たちの不平不満、文句の中身は、「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか」である。イエスは我々と同じ普通の人間なのに、どうして「わたしは天から降って来た」などと言えるのか、ということ。

「天から降って来る」のは神である。彼らは、主イエスが天から降って来た神であるということにつまずいたのである。「ヨセフの息子のイエス」、「その父も母も知っている」とあるように、彼らは主イエスの家族を知っている。

この6章の舞台はガリラヤ、つまり主イエスが育った地である。以前からイエスのことを知っている人も多かった。その人々は、我々はあいつが幼い頃から知っている、そのイエスが「わたしは天から降って来た」などと言うのは受け入れ難い、と思ったのであろう。ここから一つ分かることは、主イエスは周りの人々から見て特別に目立った存在ではなかったということ。普通の人だったイエスが、ある時神の国の福音を宣べ伝え始め、病人を癒したり、5つのパンと2匹の魚で5000人の人々を満腹にするという奇跡を行い始めたのである。そして「わたしは天から降って来た者だ」と語った。それで彼らは、「あのイエスが天から降って来た神であるはずはないだろう」とぶつぶつ言い始めたのである。

ヨハネによる福音書は、主イエス・キリストは人間となった神である、ということをごこれまで繰り返し強調してきた(1:1, 14, 18, 5:17, 6:20等)。今日のところもそうである。それは、この福音書が書かれた当時の教会にも、主イエスを神と信じるのでなく人間イエスとしてのみ捉えようとする人々がいたからである。ここに語られているユダヤ人たちのつぶやきは、ヨハネ教会の時代(1世紀末)にあったつぶやきでもある。

このつぶやきに対する主イエスの答えが 44 節以下である。

「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」(44 節)。これは 37 節の**「父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る」**というみ言葉と同じことを語っている。**「わたしのもとへ来る」**とは主イエスを信じてその救いにあずかることである。

主イエスのもとに来て信じることができるのは、父なる神が主イエスにお与えになった人のみである、と 37 節では語られており、ここ 44 節ではそれが言い替えられて、主イエスをお遣わしになった父なる神が主イエスのもとに引き寄せて下さるのでなければ、誰も主イエスを信じることはできない、と語られているのである。つまり、主イエスを独り子なる神と信じる信仰は、イエスが神であることの証拠を示されて納得して信じるようになるというものではなくて、父なる神によって導かれて与えられるのであるということ。

では、父なる神はどのようにして人々を主イエスのもとに引き寄せ、信仰を与えて下さるのだろうか。45 節には**「彼らは皆、神によって教えられる」**という預言者の書からの引用がなされている。これはおそらく、イザヤ書 54 章 13 節の**「あなたの子らは皆、主に****ついて教えを受け」**を指しているのだろうと思われる。

そしてこの引用に続いて**「父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る」**と語られている。この 45 節が言おうとしているのは、主イエスを信じることは父なる神によって教えられ、そのみ言葉を聞いて学ぶことによってこそできる、ということ。父なる神によって教えられ、そのみ言葉を聞いて学ぶ、それは聖書のみ言葉に聴くということである。

神は聖書においてご自身のみ言葉を語って下さっている。この時点ではそれは旧約聖書のことであるが、私たちには更に新約聖書も与えられている。旧約新約の聖書において父なる神は私たちに語りかけ、教えて下さっているのであって、そのみ言葉によって私たちが主イエスのもとに引き寄せて下さる。だから、**「父がわたしにお与えになる人」、「父が引き寄せて下さる人」**というのは、聖書のみ言葉をしっかり聴く人である。聖書から神の教えを受けることによってこそ人々は、主イエスが独り子なる神であることを信じることができる。

それを信じることができずにつぶやきが生じるのは、聖書から神の教えを聴こうとせず、自分の考え、感覚、あるいは人間の常識によって主イエスのことを判断しようとするからである。人間の感覚や常識からすれば、ヨセフの息子で両親のことも知っている普通の人間イエスが天から降って来た独り子なる神であるはずはない。しかし聖書から神の教えを聴いていくなら、3 章 16 節にあるように、**「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」**という神のみ心を知ることができる。

そのように、聖書から神の教えを受けようとする者を、神は主イエスに与え、主イエスのもとに引き寄せて下さる。また逆に神が主イエスに与え、主イエスのもとに引き寄せて下さっている者は、聖書から神の教えを受けようとする。そこに、主イエスは天から降って来た独り子なる神であると信じる信仰が与えられる。

主イエスは天から降って来た独り子なる神であると信じるとは、言い替えれば 46 節にあるように「父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである」と信じることである。これは 1 章 18 節の言葉、「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」と同じことを語っている。独り子なる神である主イエスによってこそ私たちは父なる神を示され、信じることができる。父なる神が主イエスのもとに引き寄せて下さった者こそが信じることができるというのはこのことのためである。

47 節. 「はっきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。」

主イエスを信じる者は永遠の命を与えられる。なぜなら、48 節で主イエスが言うておられるように「わたしは命のパンである」からである。主イエスは、「天から降って来て世に命を与えるパンである」。父なる神が天から与えて下さるまことのパンである。このパンを食べる者は、永遠の命を得る。そのことが 49 節以下に語られていく。

「あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」

エジプトを脱出したイスラエルの民は、荒れ野の 40 年間の旅において、神が天から与えて下さったパンであるマンナを食べた。でもそれは、肉体の命のためのパンであって、食べてもまた空腹になり、繰り返し食べなければならないものであった。そして、それを食べて満腹した人々も、寿命が来れば死んだのである。地上のパン、肉体を養うパンとはそういうもの。5000 人が満腹した奇跡を体験した人々は、その地上のパンを求めて主イエスのもとに集まって来たのである。

しかし主イエスは、地上のパンを与えるためにこの世に来られたのではない。「わたしは天から降って来たパンである」「わたしは命のパンである」と言われたように、主イエスご自身が、父なる神が与えて下さった「パン」なのである。主イエスからパンを与えていただくのではなくて、「主イエスというパン」を与えられ、食べるのである。

主イエスが天から降って来たパンであると信じるとは、天からのパンである主イエスを食べることである。そして主イエスというパンを食べるならば、私たちは死なない。永遠に生きる。なぜならば、主イエスは、天から降って来て、人間としてこの世を生きて下さり、私たちの罪を全て背負って十字架の上で死んで下さったことによって罪の赦しを与えて下さり、そして復活して今や永遠の命を生きておられる、独り子なる神だからである。独り子なる神主イエスの十字架の死と復活があったからこそ、主イエスは「命のパン」であり、この「パン」を食べるならば、その人は「永遠に生きる」と言うことができる。

「信じる者は永遠の命を得ている」(47 節)。主イエスは「信じる者は永遠の命を得るであろう」と言われたのではない。主イエスが天から降って来た独り子なる神であると信じた者は、そのことによって既に「永遠の命を得ている」と言われたのである。

しかし私たちは主イエスを信じた者であっても、永遠の命を得てはいない。信仰者も病気になるし、年をとって弱っていくし、そして誰もが必ず死ぬ。そのことは、信仰があろうとなかろうと変わらない。主イエスもそのことを御存じで、40 節でこう語っておられた。

「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

「永遠の命」は、「世の終わりの日に復活させられる」ことによって与えられるのである。「永遠の命」はこの世の人生の中で得られるのではない。この世の人生は死によって終わる。しかし世の終わりに、主が私たちを復活させて、永遠の命を与えて下さる。私たちはそこに希望を置いて、世の終わりにおける復活と永遠の命を待ち望みつつ生きるのである。

その上で、しかし主イエスは 47 節では、「**信じる者は永遠の命を得ている**」と言われている。それは、主イエスを信じる信仰によって私たちは、神が与えて下さる新しい命、永遠の命を生き始めているということである。主イエスを信じて洗礼を受け、キリストと結び合わされて生き始めた者は、命のパンである主イエスを食べ、既に永遠の命を生き始めている。しかしその救いは未だ完成していない。この世の人生にはなお人間の弱さがあり、罪と死の支配がある。私たちは、人間の罪と弱さによる苦しみ悲しみの多い人生を、確実に死へと向かっていく歩みを、主イエスによる罪の赦しを受け、終りの時に神が与えて下さる復活と永遠の命を待ち望みつつ、それゆえに苦しみや悲しみにおいても忍耐して、希望を失わずに歩む。「**命のパン**」である主イエスは、その歩みにおいて私たちを養い、生かして下さるのである。

51 節の終わりに、「**わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである**」とある。これまでは私たちを生かす「**まことのパン**」のことが語られていたが、ここでそれが「**肉**」という言葉に変わっている。そしてこの後のところでは今度は主イエスの「**肉を食べ**」、「**血を飲む**」という話になっていく。これは明らかに、「**聖餐**」を意識していることである。洗礼を受け、主イエス・キリストと結び合わされた者は、聖餐のパンと杯にあずかり、独り子なる神主イエス・キリストの肉と血とをいただく。それによって、主イエス・キリストが十字架の死によってなし遂げて下さった罪の赦しと、その復活によって父なる神が私たちにも約束して下さった復活と永遠の命の恵みを体全体で味わい、その恵みに養われて歩むのである。「**聖餐**」こそ、「**天から降って来た生きたパンである主イエス**」を食べて私たちが生かされるために主が備えて下さった食卓である。洗礼を受け、聖餐に与っている人々は、主イエスの十字架と復活による罪の赦しと永遠の命が自分に既に与えられており、新しい命を生き始めていることを確信することができる。